

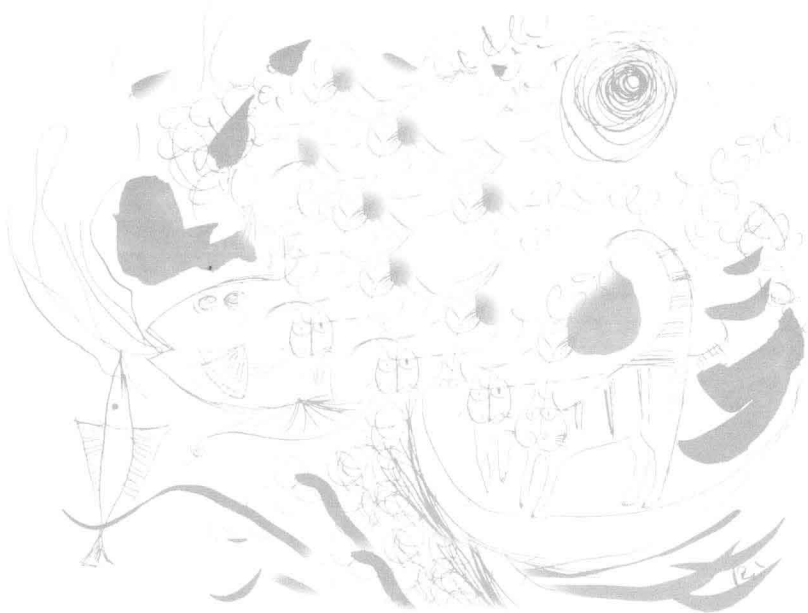
愛の本



真野さよ

ちくま少年図書館8
社会の本





愛の本

真野さよ

ちくま少年図書館 8

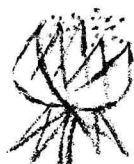
社会の本

915/愛の本

著者略歴

1913年、高知県に生まれる。日本
女子大学国文学部中退。著書に、
詩集『葡萄祭』、長篇小説『枯草の
手袋』がある。

筑摩書房／1970年初版
253 pp／18.8 cm／四六判



1970年11月25日 第1刷発行 650円

著者 © 真野 さ よ

発行者 竹之内 静雄

発行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

電話 東京(291) 7651 (代表)

郵便番号101-91/振替・東京4123

厚徳社印刷・和田製本

(分類) 8095 (製品) 04008 (出版社) 4604

もくじ

初恋 5

御簾^{みす}のかげで 48

☆名なしの墓^{はか}(メルヘン その1) 91

きょうだい地蔵^{じぞう} 102

☆虹^{にじ}の魚(メルヘン その2) 135

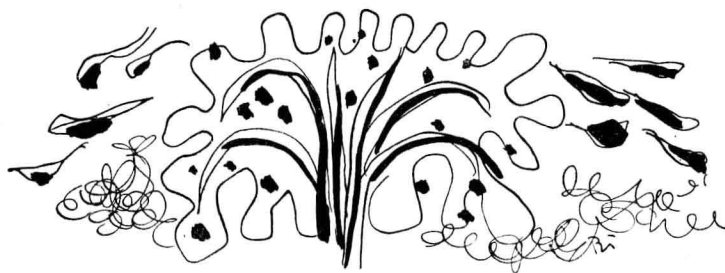
なつかしきタイガの友 140

☆白うさぎとワニザメ(メルヘン その3)

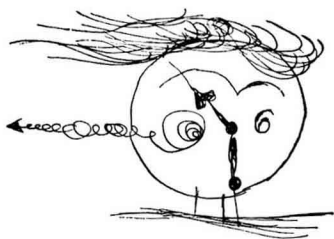
革命家の妻マリーナ 197

182

さしえ
峯^{みね}
梨花^{りか}



愛
の
本



初恋



大学二年生に進級した春休みのさいしよの日、私はM川堤かわづつみの下かの河川敷せんじきを散歩しました。ちかごろ、公園風にととのえられた河川敷の芝生しばふはまだいちめん枯色ながら、よくみると、そこにもここにも若草の緑がまじり、うすぐもりの空からはときどき小雪がちらつくかと思えば、その空のさけめから、にわかに金色の陽ひがもれたりしました。風が冷たいので、私は赤いネッカチーフをかぶっていました。歩きながら、私の目はみるともなく対岸に吸いよせられていましたが、堤の上の松並木のむこうに、家々は銀灰色に遠くかすんでみえました。

ごおっと音をたてて、すこし先の鉄橋を、オレンジ色の長い線になって特急電車が通過しました。そしてそのあと、鉄橋の手前のせまい歩道橋のたもとから、いま渡りはじめた人影を目にしたとき、私は思わず息をのんでたちすくみました。



ズックのかばんをさげた中学生でした。やわらかい肩つきとすらりと長い脚^{あし}でした。その脚は、黒いズボンの下でまっ白な運動ぐつを歩道橋の手すりの間にちらつかせながら、大またに歩いてゆきます。

まぎれもない「あのひと」の歩きかたです。

しかし一瞬の後、私は自分の錯覚^{さくかく}に気づかないではいられませんでした。あのひとがいま、五年前の中学生に逆もどりするはずはありません。いつとき、私はぼんやり立っていました、ひざがしらがひどくふるえるので、どこかで休みたいと思いました。

流れに近い石のベンチに腰かけて、私は目をつむりました。歩道橋がかび出しました。そしてそのたもとに、紺^この制服をきて赤いかばんをさげた中学生の女の子がふたりあらわれました。同じくらしい背かっこうで、ひとりのほうは前髪をまゆの上までたらし、うしろも少し長めのおかっぱで、ミルクのように白い顔をしていました。もうひとりのショートカットの髪の子は、まんまるな小麦色のほおを上気させ、キラキラした目で対岸をひたとみつめたまま、宙をゆくような足どりで歩いていました。ところが、やがてその歩みがびたりととまりました。まる顔の子はらんかんにしがみつき、うって変わったたよりない表情で、川の流れを見おろしていました。

前髪の子がのぞきこみ、腕をひいたりしたあげく、まる顔の子もまた思いなおしたように、歩きはじめました。前髪の子が笑いながら話しかけましたが、もうこたえもしません。

こわいほど緊張した顔は、ただ一つのこと以外、なにも考えてはいない証拠のようでした。そして、その女の子が私なのでした。

こうして私は、あの橋を渡ったのです。ただ一度だけ、あの橋を渡ったことがあるのです。五年も前のことです。

いま私の目のさきを、とどころ小さくあわだちながら、川は流れていきます。あの時も川は流れていました。しかし、あの日の水はどこにいったのでしょうか。しかも、あの日の私はここにいます。そして私はおなじ私なのでしょうか。

中学二年生のときでした。

そのころ私は「光る一つ星」と先生方から呼ばれ、「勉強ひとすじに歩む子」と思われていました。家から学校まで二十三分の道を、朝夕、判でおしたように往復するほかは、寄り道ひとつしたこともありません。私はポケットに単語カードをいれ、赤信号の待ち時間は、カードを繰るのがたのしみでした。英語の勉強は、私にはすこし気のはる遊びのようなものでした。

ある朝、校庭の花壇の前によりあった数人の友だちが、むちゆうでなにか話しあっていました。バス通りの貸衣装屋のウィンドーで、この日花嫁人形の衣装がえがあったということです。その前を通りながら、気づかなかったのは私ひとりでした。



「いやあ、外山さんはやっぱり、光る一つ星、やわ」

「下界のこと、なんも知りはれへん」

みんながどっと笑いました。その笑い声のなかには、尊敬もねたみも、親しみも、そして軽いあなどりさえ含まれていることに気づかないわけではありませんでしたが、私はあんがい平気でした。私はほんとうに勉強が好きでしたし、にわかにそのころから、別に心をうばわれるものができていました。

それは、矢島英男ひでおという同級生でした。すらりと背が高く、バレーボールの試合のときには、しなやかに身をそらせてジャンプし、つぎの瞬間にはかがみこむ、すばやい彼の動きを追って、私の全身は魔法にかけられたように自由を失っていました。サーヴを打つといって、左手にボールを捧ささげ、祈るような一瞬の姿には、神にむきあった人の敬虔けいけんさと、世界じゅうを敵にまわした王子の孤独をみるようで、おもわず胸の中があつくなるのでした。

といつて、ふだんの彼は聡明そうめいで、快活な少年でした。若い木のようにさわやかな感じが好きでしたし、澄すんだ泉を思わす目に、とりわけひかれていました。クラスでの成績は、たいいてい私が一番で、彼は二番でしたし、英語によせる熱情が共通しているのも、うれしいことでした。

中間考査前の英語の時間が自習になったときのことです。席の近い友だちどうし四人で、

紙に英語を書いてやりとりする遊びをしました。彼が中ひとり女友だちの肩ごしに私に渡した紙片には“Will you lend me a pencil?”と書いてありました。とっさに、私はその紙片の裏に“I love you.”とかきました。心臓が破れたようににはげしく動悸をうちはじめたのは、その直後からでした。顔がほてり、ひざががくがくふるえてきました。

書いてしまった。

とうとう、書いてしまった。

とたんに、五十人ほどの級友のいる教室は広い砂漠にかわったようでした。自習時間のざわめきは潮のひくように遠のき、この世でひとりぼっちの私はどうしていいかわからないのです。

渡せ、今をはずせば時は二度とない。

いけない。とりかえしがつかない。

耳の中ではげしく鐘がなりはじめ、鐘の音にまじって、二つの声がけわしく争っている。した。

「ハリー・アップ」

と彼の声が耳をうったとき、私の心はきまりました。すばやく紙片をたたみ、鉛筆にそえてさしました。前にもまして恐ろしい時間がそこからはじまりました。

渡してしまった。



告げてしまった。

消えてしまいたい悔いで胸がはりさけそうなのに、その下から、わくわくする期待もこみあげてきます。吸う息、吐く息のひと息ごとに、時がすぎていきます。裁き^{さだ}き^めを待つ苦痛とはこれなのだ、おおげさな考えもひらめきました。そのくせ、目にうかぶのは身がってな想像ばかりで “I love you too.” とか “I also love you very much.” の文字や、じつと私をみつめる彼の目、笑いかける白い歯、さしだされる手、肩にかかる重い腕……。わずかに二分かそこの息ぐるしい時間のすき間をぬって、私はどれほど多くの空想を描いたことでしょう。

彼の手がつとのび、鉛筆といっしょにかえてきたものが、さきの紙片で、何一つ書き加えられない無言の答えだと知ったとき、全身の血がひいてゆくのおぼえました。もう何も考えられませんでした。私は紙片をにぎりしめ、さわがしい教室をぬけだしました。人気のないとびらの外に立ったとき、ふたたび私は途方にくれました。これからいっただうすればよいのかわからないのです。長い廊下^{ちうか}のゆきどまりの窓に向かって小走りに駆けるとき、涙がしきりにほおをつたっていました。

窓の外には白々と明るい校庭がひろがり、体育館わきのクスノキの大樹があわい黄緑の炎をさかんにふきあげています。そしてその炎の中から、追いあげられたように、一羽の黄色いチョウがとびたちました。チョウはいつとき、クスノキのしげみのまわりをためら

うようにひらひらしていましたが、やがて青空のなかに吸われて、みえなくなりました。かぼそいからだ、切手ぐらいのうすい二枚の羽。私は生まれてはじめてチョウの心細さを感じ、また新しい悲しみがこみあげてきました。

「泣かんとけや」

低くおさえた声を、肩の上でききました。彼でした。とたんにクスノキのしげみが白くぼやけてきました。すると、涙を流しながらも、今の今までの凍^{こお}るような思いが、もう甘い快さにかわり、これからおこるすばらしい期待に胸がときめきました。しかし、彼はなにもいわず、私もふり向きません。息ぐるしいいつときが過ぎました。たまりかねた私は、身をひるがえすなり、もときた廊下を反対の方向にかけだしました。息せききって追ってくる彼を期待しながら、階段をかけおりました。

しかし、彼は追ってはきませんでした。

学校がひけて、いつもの道を歩きながら、私は自分が物語のなかの旅人のような気がしてなりません。まだ日ざかりで街はさかんに動いているのに、いっさいのざわめきもきこえず、夕ぐれのように暗く、自分の家にむかいながら、そこがすこしも心をやすめてくれる場所のような気がしません。

家とか家族とかは、私にとっていったいなんなのでしょう。



私には兄と姉がいるのですが、もう結婚して家をでています。おそく生まれた末っ子の私は、ひとりっ子のように両親にかわいがられていますが、ふたりとも、けっきよくは私を、すこしでも「ええところ」へお嫁にやるだけがないよりのたのしみのようです。

去年、近所の短大生のお姉さんが、失恋自殺をしかけた事件がありました。

「あほらし、愛やの恋やのいうやつにろくなもんはおらん。学生は勉強さえてたらええんや。あこは親がなまけもので、マージャンばかりしてるさかい、あかんねん」

「つまらんことでんなあ。恥かいて、ぎょうさんお金つこうて、そのうえに嫁入りの大傷でんがな。ま、うちの子は勉強好きやさかい、その点はなんの心配もあれしまへんなあ」

そのころ、父と母のそのような会話をよく耳にしました。そのたびに私は耳をふさぎたくなり、なんととはなく、短大生のお姉さんに同情したい気になっていました。

きょう、とぼとぼと道を歩きながら、そのお姉さんがへんになつかしい気がしました。

今は山陰の親類にあずけられているそうです。

玄関の格子戸をあけるとき、まるで鉄の戸のように重い感じでした。裏の方で、母が其所がしように洗たくものをとりこんでいるすがたがみえたので、ちよつと声をかけ、すぐ二階の自分の部屋にはいるなり、たたみの上に、毛布をかぶってねました。

頭のなかが鉛のくずでいっぱいになったように重く混乱して、とても立ってはいられませんでしたし、その混乱のなかから、すこしも早くなにかの結論がほしいのでした。つま

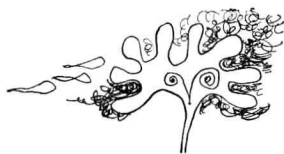
り、彼は私を好きなのか、きらいなのか。きらいならば、わざわざ廊下^{ろうか}を追ってきて「泣かんとけや」とはいわなかったはずだ。では好きなのか。好きならば、その女の子が泣きながら階段をかけおりにゆくのを、冷たくきはなしたりできるだろうか。きらいなのだ。きらいだからこそ、女の子が生まれてはじめて、ふるえながら告げた言葉を、平気でつきかえしたにちがいない。それにしては、なぜ廊下を追ってきたのか。「泣かんとけや」とたしかにいった。それならば、いや、しかし……。

私の考えはおなじところをぐるぐるまわるばかりで、なにひとつ結論は出てきません。でも私はほしいのです。せめて、糸ひとすじの手がかりでもいいのです。

頭のなかの鉛^{なまり}くずはますます数をまし、ふくれきったところで、大きな音をたてて破裂^{はれつ}しそうですね。その前ぶれなのか、頭のしんがずき痛^{いた}んできました……。

にぎやかな商店街のようなどころでした。私はだれかに足をふまれたり、自転車にぶつかりそうになったりしながら、夢中^{むちゅう}であの人のうしろすがたを見失うまいと、いそいでいました。人びとの肩ごしに、制帽からはみだしたやわらかい栗色の髪が、あの人の特徴でした。角をなんども曲がりました。ふと気がつくと、彼が郵便ポストの前で、白い歯をみせて笑いかけているのです。私を待っているのです。夢のようだと思いながら、かけよりました。

あの返事、ここへいれといったよ。



彼はポストを指さすと、すぐきびしい顔つきになり、

ぼく、いそぐねん。アルバイトにいかんなんよって。

いうなり、うしろすがたを見せたと思うと、もうどこにも見えません。キツネにままれたような気持でぼんやり立っていると、驚いたことに、目の前のウインドーで、彼がまた笑いかけています。いつのまにかおとなになった彼が、タキシードをきて、ひじをかく曲げた片手に、白い手袋までもっています。そうか、スタイルがいいので、モデルにやとわれたのだと、見あげると、その顔はつくったような微笑^{びしょう}をうかべ、遠いところに視線をあてた、モデル人形なのでした。

人形になってしまった。

とりかえしがつかない。

たとえようもない寂しさでした。ところが、次の瞬間、私は校庭に立っていました。あのクスノキがあつてまぎれもない校庭なのに、飛行場のように広いのです。そして、あつという間に、まっ黒な群衆がおしよせ、わあっ、わあっと叫んでいます。その中から、もみくちゃになって、青いトックリセーターの少年がとびだしました。彼でした。大きなスリーケースをさげた彼は、つかつかと私の前にきて、困ったような顔で、早口にいいました。

ぼく、アフリカへいかならんねん。バレーボールの試合や。